十年目の歩み

――広島芸術学会　平成八年度活動報告――

米門公子

▼平成八年七月二十日(土)・二十一日(日)・二十二日(月)

広島芸術学会が創立十周年を迎えるこの度の大会は、「芸術学百年の成果を再検討し、芸術学の未来を展望する記念大会」とすべく、現在第一線で活躍する気鋭の研究者を迎えて開催された。大会は一般公開され、二十日、二十一日の二日間で六百余人の参加者があり、大盛況であった。

初日の二十日、広島市中区小町の中国電力本社講堂において、午前十時三十分から十一時三十分まで第十回総会を開催。平成七年度の事業報告、決算報告、監査報告がなされ承認された。続いて、八年度の事業計画、予算案が提出され、承認された。

同日の午後一時から、同じ会場でいよいよ大会の開始。まず最初に金田晉氏（広島大学・美学）が、「かたちの論理――芸術学の百年――」と題する基調報告を行った。続いては三人の若手研究者による研究発表。①「コンラット・ランゲの美学理論」／清永修全氏（広島大学大学院・芸術教育）②「ワイマール時代の機械音楽」／奥中康人氏（大阪大学大学院・音楽学）③「二つの『根源』の近さと遠さ――フィードラーとハイデガーの間――」／高梨友宏氏（帝塚山学院大学・美学）。午後六時から発表者を交えてリバークルーズで懇親会を開催、五十数名が参加した。

二日目の最初のプログラムは、午前十時から始まったシンポジウムI「芸術学の現代――メディアと観客・聴衆――」。パネリストは青木孝夫氏（広島大学・演劇美学）、樋口聡氏（広島大学・スポーツ美学）、渡辺裕氏（東京大学・音楽美学）。

午後一時からは岡林洋氏（同志社大学・美学）が、特別報告「芸術学の現在――感覚・メディア・異文化からの見直し――」を行った。続いて二時からはシンポジウムII「芸術学の現代――異文化美術への視線――」が始まり、稲賀繁美氏（三重大学・比較文化）、圀府寺司氏（広島大学・西洋美術史）、千野香織氏（学習院大学・日本美術史）、吉田憲司氏（国立民族学博物館・民族芸術学）がパネリストを務めた。

また、アトラクションとして、尹仁淑氏（歌手）の韓国民謡独唱と、中畝みのり氏（バイオリン）と青山万知子氏（ピアノ）による演奏が二日間にわたり行われた。

大会最終日の二十二日は広島県豊田郡瀬戸田町・耕三寺へのエクスカーション。午前十時半に三原港を出発。耕三寺では、境内に建てられた建造物の建築様式の特徴などについて、広島大学の菅村亨氏の懇切な説明を受けながら極めて有意義な一日を過ごした。ただ、残念なことに当日はウィークデイであったことから、参加者が少なく七名だった。

▼平成八年九月二十日(金)

「会報」第三十九号を発行。掲載記事は、広島芸術学会第十回記念大会の発表要旨（報告者・基調報告／大石和久、研究発表①／河野奈々、研究発表②／西岡弘勝、研究発表③／亀井克朗、シンポジウムⅠ／中尾和恵、特別報告／本田代志子、シンポジウムⅡ／吉本麻美、全体討議／吉本由江）のほか、巻頭言は画家の酒井一彦氏による「ただいま、制作中」、リレーコラムにはArt Space HAP を主宰する木村成代氏の「アートは必要」を掲載した。

▼平成八年十月五日(土)

第三十七回例会は広島女学院大学の人文館三〇三教室で開催した。最初に、広島貯金事務センターに勤務する傍ら、文学社会学を研究している大山智徳氏が「壁――S・カルマ氏の犯罪をめぐって」を発表した。続いて広島女学院大学の佐藤茂樹氏が「『新古今』羇旅歌の『白雲』詠の成立」と題し、実際に和歌を解釈しながら考察を進めた。参加者は十八名。

▼平成八年十一月三十日(土)

「会報」第四十号を発行。掲載記事は、第三十七回例会の発表要旨（報告者・「壁――S・カルマ氏の犯罪をめぐって」／清永修全、「『新古今』羇旅歌の『白雲』詠の成立」／大山のり子）のほか、巻頭言は同志社大学文学部・太田孝彦氏の「伝称されてきた作品」、リレーコラムにはスチールアート作家・ナガイ毅氏の「げた工場物語――父ちゃんとの日々――」を掲載した。

▼平成八年十二月二十一日(土)

十二月十七～二十二日まで、広島芸術学会創立十周年記念行事として会員作家三十一名による「十年の軌跡展」を、建て直され十月に新装開館したばかりの広島県立美術館・県民ギャラリーで開催、各作家が十年前の作品と現在のものを各一点ずつ出品した。第三十八回例会は、この展覧会の会期中の十二月二十一日に同美術館講堂で、「作家が語る――制作の現場――」と題するシンポジウムを行い、入野忠芳氏（絵画）、奥田秀樹氏（彫刻）、酒井一彦氏（絵画）、田谷行平氏（絵画）の五人の作家会員がパネリストを務めた。この記念展を対象に、(財)エネルギア文化・スポーツ財団から五十万円の助成金を受けることができた。シンポジウムの参加者数は約百六十名、記念展の入場者数は千五百名を超える盛況ぶりだった。

▼平成九年二月一日(土)

「会報」第四十一号を発行。第三十八回例会で開催したシンポジウム「作家が語る――制作の現場――」の要旨（報告者・清永修全）に加え、同時に開催した「十年の軌跡展」について、入野忠芳（同展実行委員長／絵画）、奥田秀樹（彫刻）、酒井一彦（絵画）、出原均（実行委員）の四氏が、それぞれの立場から感想やまとめを執筆した。そのほか、巻頭言には元広島女子大教授・小池美枝子氏の「広島芸術学会の発展に想う――形象美学の確立を――」を、リレーコラムには造形作家・亀井由美子氏の「八十三歳になれなかったシノブは…」を掲載した。

▼平成九年二月二十二日(土)

第三十九回例会は広島県立美術館の講堂で開催した。一つ目の発表は広島大学大学院生の廖瑾瑗氏による「近代台湾美術の一側面――郷原古統と木下静涯を通じて――」。台湾に生まれ育った同氏がスライドを豊富に使い、独自の視点に基づく発表を行った。二つ目の発表は広島県立美術館学芸員の松田弘氏による「オフ・ミュージアムの意味」。展覧会における作品と会場の関係について話した。参加者は三十二名。

▼平成九年五月十日(土)

「会報」第四十二号を発行。掲載記事は、第三十九回例会の発表要旨（報告者・「近代台湾美術の一側面」／中尾和恵、「オフ・ミュージアムの意味」／吉本麻美）のほか、巻頭言は比治山女子短期大学の吉田正浪氏による「めでたい男」、イベントリポートには4月15～20日に広島県立美術館・県民ギャラリーで入野忠芳、奥田秀樹、酒井一彦の三氏が同時に開催した個展について、同美術館学芸員の松田弘氏が「三美神の降り立った日」と題する感想を寄せた。リレーコラムは、カメラマン・脇山功氏の「魅惑のインドネシア」。

▼平成九年六月八日(日)

第四十回例会は広島県佐伯郡吉和村にある(財)住建美術館の常設展と企画展「中国清代の陶磁器展」の見学に出掛けた。バスの到着時刻に合わせて十四時十分から十六時までを例会とし、広島大学名誉教授の嶋屋節子氏と同美術館の重藤嘉代学芸員に解説をお願いした。参加者は三十七名。

▼平成九年六月十四日(土)

「会報」第四十三号を発行。第十一回総会・大会の日程ならびに発表内容の要約を掲載した。

《平成九年六月末現在、法人会員十三法人、個人会員二百十五名（特別会員六名、一般会員百九十四名、学生会員十九名）》。

（こめかど・きみこ　広島芸術学会事務局）